

---

FINAL BATTLE!!! 【連載version】

X I C S

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

FINAL BATTLE!!! 【連載version】

### 【Nコード】

N4006K

### 【作者名】

XICS

### 【あらすじ】

高校生だったライカは、ある日謎の組織に拉致される。そこでライカは改造され、『人間兵器』と呼ばれる。ある任務中に、ライカは不慮の事故に遭い、ある少女と老人に助けられる。そこから、真の物語は始まる……。

これは、私の処女作を連載versionにした物です。内容は短編versionと何も変わっておりません。

## Zero (前書き)

これは、私の処女作を連載versionにした物です。内容は短編versionと何も変わっておりません。

今、俺は自由な生活をしている。この話は、俺が今の体を取り戻す前の話だ。まあ、聞いてくれ……。

……ふう。やっと終わった……。

くそ……何で俺はこういう事やってんだ……。

戦いの後は凄惨な光景だった。死体がそこら中に転がり、血が発する臭いが体中に纏わり付き、常人ならばここには数秒とも居られないだろう……。

それにしても今日の敵は手強かった。久しぶりに傷を負った。しかし、俺の前では蠅同然だ。小賢しいんだよ。殺っても殺っても沸いて来る。民兵だろうが軍隊だろうがかかってこい！

……でも、俺はこんなことやるなんて望んでない。奴らの考えと俺の本音がせめぎあっている。

俺にはどうしても負けられない訳がある。え？ 何で負けられないって？ まあ、落ち着け。後で話すんだから。

俺は一人のしがない高校生だった。今じゃあ、立派な21歳だ。あ、そういやあ名前言ってなかったな。俺はライカ。ライカールークールインだ。いや、ライカールークールインだった……。何故過去形にするかって？ もう俺は、人ではないから……。

俺が高校1年だったとき、『破壊組織』っていう所に拉致されて、即刻眠らされて、気がつけば俺はベッドの上で寝ていた。俺の右腕に感覚がない……。そう思って右腕をみると、俺の右腕（肘から下の部分）がチエーンソーになっていた。愕然とした。叫んだ。泣いた。わめき立てた。

でも、俺の周りには誰ひとりいなかった。周りを見ると、まず目に飛び込んできたのは、刑務所みたいな殺風景な部屋だった……。

「……ここは、どこだ？」

ベッド以外なにもないこの部屋に、俺は呆然と突っ立っていた。

「ヤット……オキタヨウダナ」

どこからか、無機質な声が聞こえる。俺は辺りを見回した。しかし、何度も言ってるがここにはベッド以外なにもない。

「誰だ!??」

「ワタシハ、ココノジドウオンセイシステムノ『マーズ』ダ。チュウショウガオヨビダ。ハヤクジュンビヲシテ、12カイノカイギシツヘイケ。ハヤクシロ」

マーズはそう言うと、ブツンと音をたてて切れてしまった。

「準備をしろって言われても……」

辺りを見回してもなにもない事は分かってる。ふと、俺はベッドの下に何か光る物を見つけだした。

「……これは……」

引つ張り出すと、そこには迷彩服と義腕があつた。俺は直ぐに迷彩服に着替え、その中であつたカードキーを使い部屋を出た……。

12階の会議室に着いた俺は、おそるおそるドアを開けた。そこには、俺と同じ迷彩服を着ている白髪のジジイがいた。

「入りたまえ」

ジジイが偉そうに指図した。俺は正直ムカついたが表情には出さなかつた。

「君がライカ君か……」

「……はい」

「私は中将のゲンだ。これから君は私達の組織と一緒に戦ってもら  
う」

俺はこのジジイがどれだけ偉いかを知って、言葉遣いを変えた。

「……おっしやってる意味が解りません……」

ゲンというジジイは笑って答えた。

「ハハハ、まだ解らないのかな？ 君は兵器に造り変えられたんだよ。これから君は兵器として、私達の指示に従ってもらって行動（戦争）してくれ。ああ、それと、君は人間を捨ててくれ」

俺の頭はスパークしていた。俺が兵器？ 人間を捨てる？

「では、戻りたまえ」

ジジイは無言を言わさぬ口調で言った。俺はジジイに反論した。

「ちょっと待ってくれ！ 何で俺があんたらのために働かなくちゃならないんだよ！ 何で……」

「ライカ君、いや、55号。私の話をよく聞いてくれ」

55号……？ 俺の事を番号で呼びやがった！ ゲンは喋り続ける。

「君は人間兵器と呼ばれる道具だ。私達の手となり足となり、組織のために尽くすんだよ。もし君が戦いで負けたら、君の胸に埋め込まれている爆弾が破裂する。もちろん、裏切ったときも同様だ」

絶句した。言葉が出なかった。

「では、戻りたまえ」

俺はゼンのいいなりになるしかなかった……。

俺は部屋に戻ると、自分の胸の部分に手をあてた。確かに胸の部分に縫合の跡があり、固いシコリもあった。これが爆弾か……。

と、ここで、無機質な声が響いてきた。

「55ゴウ、サツソクダガ、ニンムダ」

任務……？ 怪訝に思いながらも、俺の足は12階の会議室へと向いていた。

会議室には、ゲンと、その他の軍服姿の人間がいた。ゲンを含める全員が冷たい目をしていた。

「これから、任務についての説明を始める」

ゲンが厳しい口調で言いはじめる。

「13号、25号、そして55号。君達には隣国のB国に行ってもらう。人間兵器は、最早君達3人だけだ。その貴重な命を大事にしてほしい！」

……俺達3人？ これだけしかないのかよ！？

「それでは、任務開始！！ 屋上のヘリポートへ行くのだ！！」

俺達は、無言でヘリポートへ急いだ。

ヘリポートでヘリに乗ると、ものの10分でB国に着いた。B国は、戦場だった。土地は荒れ果て、難民が汽車に載って隣のC国を目指している。突然、俺達が持っていたトランシーバーから無機質な声が聞こえた。

「コンカイノニンムハ、10キロメートルゼンポウニミエル、テキノキチヲハカイスルコトダ。シツパイハユルサレナイ」

俺達3人は、敵のアジトに向かって走った。敵をばったばったと切り伏せ、血を浴びながら。どうやら俺は、頭も改造されているようだ。人を何人も殺しても何も感じない。寧ろ快感だ……。しかし、良心も少しだけ残っていて、それが働いている。俺は何をやったと……。

一人の悲鳴が聞こえた。25号だ。右足を切断されて、動く事ができないようだ。すると、25号の胸が光ったと思うや否や、25号が破裂した……。跡形もなく……。俺は凍りついた。しかし、13号は気にせずに敵を蹴散らしながら突き進んでいった。

すると、いきなり13号が俺の視界から消え失せた。俺が気にせずに突き進んでいると、突然俺の眼前が光った。13号が破裂した……。どうやら落とし穴のようだ、下は針山だった……。俺がそのまま突き進んでたらしらと思うと、ゾツとした。これで人間兵器は俺だけだ……。

無事（俺だけだが）に任務を終了して、本部に戻った。

「この度の任務の成功、見事だった。では戻りたまえ」

ジジイ……。報酬は無しかよ！ これも人間兵器の宿命かよ。使われるだけ使ってポイかよ。俺は心の中で毒づいて、会議室を後にした……。

ああ、こんな生活がいつまで続くんだ……。

こんな生活が2年続いたある日、また任務だ。俺は疲労困憊の体で会議室まで行った。この2年間、誰ひとり人間兵器はいなかったから、俺はフル稼働された。

「……今度の任務は何ですか？」

ゲンはこともなげに答えた。

「ナアに、今度の任務は簡単だ。J国の征圧している都市の見張りだ。頑張りたまえ」

俺はヘリポートへ足を運んでいた。まあ、息抜きにはちょうどいいか……。この頃の俺は、この任務が最後になるとは知らなかった……。

「J国に降りると、そこは軍服姿が沢山いた。何かが入っている袋を肩に背負って立ち、大型ダンブにわんさか載せている。そこら一帯は、死臭が俺の鼻をついた。きっと中身は敵兵の死体だろう……。すると、一人の兵士が俺に話し掛けてきた。」

「お前の管轄は此処じゃない。もっと北の、F区だ。これが地図だ。頑張れよ、人間兵器君」

俺は兵士の言った言葉にイラツときたが、此処で争いを起こすと面倒なのでそのままへりに乗った。

F区に到着した。しかし此処はまだ激戦区で、大砲の音や兵士の怒号が聞こえている。まだ戦いが終わってない……。

「何で戦いが終わってない所を見張るんだ？ それに、征圧している都市じゃないのか!？」

すると、タイミング良くマーズの声が聞こえてきた。

「ソイツラハ、Jコクノハンラングンダ。イチオウ、セイアツハシタンダガナ、ヨソウガイダツタ。セイゼイシナナイヨウガンバレヨ」

「……反乱軍？ ……まあ、俺には関係ない。正規軍がなんとかやってくれるだろう。」

F区の中心部にやって来た俺は、その事態に凍りついた。正規軍と反乱軍が、相打ちになっていた。簡単に言えば引き分けた。俺は溜め息をついてから、見張りをしようとした。そこで、まるで現場

が見えてるかのように、マーズが言った。

「コレデ、オマエノシゴトハミハリダケダ。タダシ、キハヌクナ」

最初から気を抜く事は考えてない。俺をナメてんのか……。

ぶらぶら歩いてると、正規軍の姿が見えた。しかし、よく見ると、ナイフで磔にされていた。もちろん、死んでいた。

「……ぶらぶらもしてられないな……」

しばらく歩いてると、また正規軍の軍服が見えた。今度は、ちゃんと生きてる。すると、兵士は俺に向かって何か話し掛けてきた。

「やあ、55号。君の活躍は耳にしているよ」

俺も有名になったな……。そう思っていると、兵士はいきなり俺の胸に銃を向けた。

「あんた……、一体何を……」

兵士は、恐ろしい事を口にした。

「俺は反乱軍だ!! 正規軍の奴がきていた服を奪ったのさ!!」

俺は攻撃しようとした……。しかし、

「死ね!!」

そう言われ、俺は5発弾を胸に撃ち込まれた。俺は吹っ飛び、壁に

頭を打ち、意識を失ってしまった……。。

……きて……起きて……。

「ハッ！！」

俺は目を覚ました。ここはベッドの上だった……。辺りを見ると、一人の老人と一人の少女がいた。

「良かった……。無事だったな」

「ここは……何処だ？」

俺は警戒しながら尋ねたが、その質問は老人ではなく、少女が答えた。

「ここはおじいちゃんの診療所よ。あなたが倒れていたから助けたの」

俺は老人に深々とお辞儀をした。

「ハハハ、そうかしこまるな！」

老人は俺の様子が可笑しかったのか、笑って答えた。しかし、老人はいきなり真剣な口調になった。

「ところでお前さん、何で胸に爆弾が埋め込まれていたんじゃ？」

「……え！？ 何で知って……」

老人は、またすぐにいつもながらの口調で喋り始めた。

「まあ、爆弾は俺が摘出したがな！！ 八八八八！！」

そう言って、老人は外へ出た。しかし、俺は耳を疑った。爆弾は摘出した！？ これで自由の身だ……。組織から解放された……。俺は嬉しくて泣いた。少女も、俺を嬉しそうに見ていた。

しかし、手術後なので胸が痛くなった。俺は泣きながら胸を抑えてベッドに寝込んだ。

「だ……。大丈夫ですか？」

少女が心配そうに見てくれている。

「ああ、大丈夫だ」

俺は痛みを堪えて言った。しかしこの少女、俺の右腕を見ても何も言わない。本当は怖いのかも……。

「……。なあ、あんたはこの腕を見ても怖くないのか？」

「いいえ、何も怖くないですよ！ こんなことで人を差別しちゃいけませんから」

少女は、澄んだ声で言った。俺は感激した。

「……。ありがとう。俺は『人間兵器』って言われて、いつも人から疎まれていた。あんたが初めてだ……。俺の事を怖がらないのは」

少女は、可愛く笑って部屋を出た。そのあと、急に眠気が俺を襲った。俺は深い眠りについた……。

俺が目を覚ましたのは10時間後だった。ちょうど、少女がスーブを持って来た。俺は少女に質問した。

「なあ……あなたの名前は？」

「アタシはマイ。マイ＝マリア＝ルミエル。あなたは？」

「俺は55号。番号で呼んでいいよ」

「ダメですよ！ 人には必ず名前があるんですからね。本名を教えてください」

俺は戸惑いながらも、本名を教えた。

「……ライカ。ライカ＝ルーク＝ルインだ。戸籍上ではな」

「素敵な名前ですね。こんな素敵な名前なのに、何で番号で呼んでいるの？」

「さつきも言った通り、俺は『人間兵器』って奴だ。『それ』は、番号で呼ばれるのが基本だ。最初は俺は番号で呼ばれるのが嫌だった。でも次第に慣れてきちゃって、もうどうでもよくなってきたんだよ」

すると、マイは澄んだ声で微笑みながら俺に語りかけた。

「じゃあ、これからは名前で呼び合いましょう！ もうライカさんは、『人』なんですから……」

俺はこの言葉をきいて、更に胸が熱くなった。

「……ああ、マイ。短い時間だけど、これからよろしく」

「はい！ よろしくお願ひします！」

マイは、微笑んで答えた。その笑顔は、とても可愛かった。

「じゃあライカさん、スープ置いときますね。よろしければ飲んで下さい」

そう言つて、マイは部屋を出た。そうだ。俺はライカなんだ。これからは人間を捨てる必要はない。これからずっと、此処で暮らそうかな……と、スープを飲みながら思った。

夜が明け俺が目覚めると、胸の鈍い痛みが残っているまま、俺は洗面所に行こうとした。しかし、玄関が何か騒がしい。玄関を覗いてみると、そこにはマイと正規軍の姿があつた。

「やめて下さい……！」

「うるさい！！ 我々の所へ来るんだ！！」

「私を何処へ連れていくんですか！？」

「お前の国は戦争で負けたんだよ！！ だから我々の国の奴隷になるんだ！！ お前は女だから、慰安婦にでもしてやるよ！！」

「……！？そんな……。アタシまだ14歳なのに……！！」

「うるさい！！早く来るんだ！！お前はまだ若いから、タップリと可愛がつてくれるだろうなあ！！」

「そ……そんな……。イヤー！！絶対イヤア！！」

正規軍の奴がマイの腕を無理矢理引いている！！俺は凍りついた。早くマイを助けなきゃ……。俺は走り出していた。

「へへへへ……」

「……イヤアアー！！放してえ！！」

「やめろおー！！」

正規軍の奴は、俺を睨んだ。

「……なんだ、テメエは！？」

俺もまけじと武器を出した。チェーンソーの刃がキラリと光った。正規軍の兵士は怖じけづき、尻尾を巻いて逃げた。マイはその場で脱力し、へなへなと地面に膝をついた。俺はマイの肩を叩いた。

「大丈夫か！？マイ！！」

マイは俺の方を向いたが、マイは泣いていた。よっぽど正規軍の兵士が怖かったんだろう。

「……怖かったよお……」

マイが俺に抱き着いてきて、声を出して泣いた。老人はまだ寝ていたので、泣いている事には気付いていない。

「そうか、怖かったか。でも、もう大丈夫だからな。俺がついてるからな……」

「……うん、ライカ君がいれば大丈夫だよね……」

マイは笑いながら言った。俺はマイを苦しめない程度に抱きしめてやった。

t h r e e

「ライカ君の胸、暖かいね……」

俺はマイを部屋に連れていき、マイの添い寝をしてやった（あ、別にいかがわしい事はしていないぞ）。と、その時、ドアを開ける音がした。そこには、老人が立っていた。

「ハハハハ、2人とも若いのお!!」

マイは顔を真っ赤にしてベッドを出た。

「……!! 違うの!! おじいちゃん、これは……」

そして、俺に小さな声で礼を言って、マイは彼女の部屋へ駆け足で戻って行った。

「ハハハ、お前さん、これは一体どういう事だ？」

俺は、さっき玄関で起こった出来事を話した。老人は数回頷いた。

「……そうか、お前さんには感謝せんとな!! 儂の孫を助けてくれて、ありがとな」

昼をまわった頃、マイが俺を訪ねてきた。

「……ごめんなさい。アタシと一緒に寝てなんて言ったから……」

「気にするな。お爺さんも分かってくれたから」

「……そう」

暫く無言の時間が続いた。それに気まずさを感じた俺は、口を開いた。

「……マイって、まだ14歳なんだな……」

「……うん」

マイは言葉を付け足した。

「……さっきはありがとうございます」

俺はマイに礼を言われて、少し顔を赤くした。マイの顔も赤かった。その顔が、とても可愛かった。

前置きで言った言葉は勝手ながら撤回させてくれ。俺は、人になつた。もう人間兵器ではない！！ちゃんと感情もある。もう人間を捨てない！！

マイと出会って、半月が経った。俺は、マイの祖父の診療所で働いている（居候だな）。チェーンソーは俺のベッドの下に置いとぎ、義腕を使って生活している。

「ふう……。疲れた……。……」

俺は夕方になるといつもクタクタになって、ベッドに直行する。

「何か飲み物でもいる？」

マイが、俺の前に現れて尋ねた。俺はすぐに寝たかったが、喉の渴きには勝てなかった。すぐに何か一杯欲しかった。

「水を一杯欲しいんだが、持ってきてくれないかな」

「うん！ 今持って来るね！」

「あ、また襲われるかもしれないから、俺もついていくよ」

「……アリガト」

マイは顔を赤らめて言った。

俺はマイと一緒に、ミネラルウォーターを取りに行った。俺はそれをコップ3杯程飲んだ。しかし、マイは何故か飲もうとしない。心なしか、マイの顔が赤い。

「おい、マイ。大丈夫か？ 熱でもあるのか！？」

「いや、大丈夫、大丈夫だから」

いや、どう見ても大丈夫ではない。何故か呼吸が荒い。俺は、マ

イのおでこに手をあてた。

「……………!! 熱があるじゃないか!!」

俺はマイにミネラルウォーターを飲ませ、俺のベッドに寝かせた。熱は40 位だろうか。いや、これだと更に危険だ。

「……………ごめんね、ライカ君。いつも迷惑かけて……………」

「いや、いいって。それよりも、解熱剤は何処にあるか知ってるか?」

「入口付近の棚の、上から二番目の引き出しに入って……………ゴホッ、ゴホッ!!」

まずい……………。嫌な咳まで出てきた。しかし、偶然同じ棚に総合感冒薬（子供用）が入っていた。それをマイに飲ませ、寝かせた。仕方がないので、俺は床で寝ることにした。

「……………早く元気になってくれ……………」

まだ夜中だと言うのに、俺は目を覚ました。外が異様に騒がしいのだ。俺が外を覗くと、外は大変な事になっていた。正規軍による略奪が始まったのだ! 金品は勿論、女・子供も連れさらわれる。このままでは、マイが……………。俺は、老人とマイを無理矢理起こした。

「マイ、じいさん、大変だ!! 正規軍の奴らが来た!! 早く逃

「げよう!!」

「逃げるって行っても、何処へ逃げるんだ?」

「とにかく、早く金を持って逃げよう!! 家から出るだけでいいから!!」

「おじいちゃん、ライカ君、裏口から逃げよう!!」

俺達は、有り金を全て持って裏口から逃げた。すぐに、正規軍の奴らが来た。

「おい、金か女子供はいるか?」

「ダメだ……。夜逃げしちまつてる」

「くそ……。次をあたるぞ!!」

正規軍の奴らは帰っていった。俺達は再び診療所に戻り、またぐっすりと寝た。

翌朝、俺の胸の痛みはほとんど消え、マイの風邪はほとんど治っていた。

「ありがとう、ライカ君。ライカ君が気付いてなかったら、今頃アタシは……」

「いやいや、お前さんには感謝せんとなあ」

「あ、いえ、どういたしまして」

俺は照れ笑いをしながら言った。

「あ、ライカ君の顔、真っ赤だよ」

「まるで林檎じゃわい。ハハハ!!」

俺とマイは、老人につられて笑った。ああ、皆で笑いあったのは何年ぶりだろうか。俺は、このひと時が天国のようだった……。

「何!? まだ55号と連絡がついてないだど!?」

12階の会議室で、中将のゲンが怒鳴った。

「はっ!! おそらく、トランシーバーが壊れて……」

「黙れ!! 一刻も早くF区にアレを向かわせるのだ!! そして55号を連れ戻せ!! 刃向かう場合は殺せ!!」

「はっ!!」

こうしてゲンは、アレをヘリポートへ向かわせた……。

ある夜中俺が寝ていると、マイが俺の部屋を訪ねてきた。

「マイ、どうしたんだ？」

「眠れないの。また軍隊が略奪に来ないか心配で……」

「……怖かったのか……。分かった。今夜だけ俺の傍で寝ていいぞ」

「……アリガト。でも……」

「でも……、なんだ？」

「今夜だけじゃなくて……、これからずっと……ライカ君の傍で寝たいの」

俺は心臓が跳ね上がった。こんな経験は今までなかった。俺は顔が真っ赤になっていた。自分でもわかる位、頬が熱くなっていた。マイも、俺と同じ位頬が赤くなっていた。

「ダメ……かな？」

「い……いいけど、俺の部屋にはベッドは一つしかないぞ!!」

「それでも……いいわ。ライカ君と一緒に居たいの」

おいおい、こりやまさか……。いや、俺の考えすぎだ！ しかし、俺は念に念を入れて質問した。

「……マイ、俺の事、どう思ってる？」

すると、マイはクスクスと笑い出した。なんだ、俺の考えすぎか……、嬉しいような、淋しいような気持ちかした。

「何言ってるの？ アタシは『想っている』の……」

俺は今度こそ分かった。まさか……。

「もう……分かったでしょ？ アタシは……ライカ君の事が……」

もう、分かっていた……。しかし、マイの話の邪魔はしなかった。

「……好きだったの……」

マイは半ベソになっていた。しばらく、沈黙が続いたが、俺は心を決めた。

「……俺で良ければ……」

「……え！？」

マイの顔に満面の笑顔がこぼれ落ちた。と同時に、沢山の涙も。

「ありがとう！！ 本当にありがとう！！ こんなアタシなのにつ、ウツ、ウツ、ウエーン……」

俺は、泣いているマイをいつまでも抱きしめていた。しかし、今度は強く。

「俺も……そんなマイが好きだ」

「え？今なんて……」

「いや、何でもない」

「ねえ、ライカ君……」

「なんだ？」

「これからずっと、ずーっとよろしくね」

「ああ、よろしくな」  
「うんっ！！」

俺とマイは、そのあとすぐに眠りに落ちた。

あの夜が明けて、俺はマイと一緒にいる時間が増えた。食事も一緒、出掛けるのも一緒、寝る時だって一緒だ（さすがに入浴は無理）。マイは俺と居ると、安心しているというか、嬉しいというか、そんな感じだ。しかし、俺は違った。俺は、マイ以外の誰かの視線を感じた。

「しっ！！ 静かに！！」

「え？」

「誰がいる！！」

「また軍隊？」

「いや、違う。軍隊じゃない別の奴だ」

すると、ヤツは俺達が気付いた事を知ったのか、攻撃を仕掛けてきた。サバイバルナイフが2本、俺達のところに飛び込んだ。俺とマイは、寸でのところでそれらをかわした。

「誰だ！？」

俺は、義腕をチェーンソーと取り替え（略奪のときから護身用と

して持ち歩く事にした。）、攻撃体制に入った。

「55号!!! お前を連れ戻しに来たぞ!!!」

そこに現れたのは、黒服でサングラスをかけ、サバイバルナイフを何百本も持っているエージェントだった。

「貴様、ゲンの手先か!？」

「ああ。とにかく、お前を連れ戻せと命令されてる。おとなしく来い!」

「嫌だ、と言った場合は?」

「おとなしく殺されてもらう!」

そう言っつて、エージェントはナイフを3本投げた。しかし、俺のチェーンソーには全く効かない。

「次は俺の番だ!」

俺はチェーンソーを振り回し、エージェントに突撃した。エージェントは徐々に後退していく。

「くそ……。このままでは埒があかない。ならば……」

そう言っつてエージェントは大きくジャンプし、マイの真後ろに着地した。そして、マイの首にサバイバルナイフを突き付けた。俺とマイは凍りついた。

「55号!!! この小娘がどうなってもいいのか!？」

「……!!! マイ!!!」

「ほほう、マイと言うのか……。確か、奴隷にしそこねた奴の一人

だと聞いたな……」

「……アタシを、どうするの!?!」

「うるせえ!!! 小娘は黙ってる!!!」

エージェントが一喝すると、マイは縮こまってしまった。そして、また俺の方へ向き直った。

「どうだ? このマイって言う小娘と交換ってことで、戻るのか!?!」

「先にマイを返せ!!!」

「……言う事を聞かない様だな。ならば……」

そう言っただけでエージェントは、マイに暴力を振るった。

「……!?! キャア!!! ヤメ……ッ……!!!」

「……!!! テメエ、やめろお!!!」

「ハハハ。すぐ殺したら楽しみが無くなっちゃうからなあ!!!」

マイは、殴られ、蹴られ、悲鳴も出せない状況だった……。俺は、その状況に耐え切れずに口を開いた。

「分かった!!! 分かったから!!! 戻る!!! 戻るからもう止め

てくれ!!!」

「ほほう、やっとその気になったか。だがな……」

「……!?!」

「一回で言うことを聞かなかった罰だ!!!」

なんとエージェントは、マイの服を引き裂いたのだ!!!

「……!?! イヤ……イヤアアアアア!!!」

確実にマイをレイプしようとしている……。

「ハハハハハ！ いい身体してるなあ！！」

「テメエ！！ マイに何て事しやがるんだ！？」

俺は、自然とエージェントが使っていたサバイバルナイフをエージェントに投げていた。サバイバルナイフは、エージェントのこめかみに命中。エージェントは吹っ飛び、血を流していた。勿論、死んでいた……。

「マイ！！　マイ！！　大丈夫か！？」

マイは痣だらけで、痙攣していた。俺は、マイを急いで診療所へ運んだ。老人は驚いた顔で俺を見た。

「一体、何があった！？」

「お爺さん、すみません！　俺、マイを守れなくて……」

「別にお前さんを責めはしない。やった奴が悪いんだからな」

「いいえ、俺に責任があります！！　本当に……」

「少し、黙っててくれ。治療に集中できん」

そう言つと、老人はマイの傷ついている部分を触り始めた。

「……大丈夫。骨折はない。当分、動けんが……」

「……俺のせいだ。俺がアイツに闇雲に突っ込んだから、マイは……」

「心配するな。お前さんは責めないよ。何度も言つが、やった奴が悪いんだからな。お前さんも、マイと一緒に休め」

「……ありがとうございます……」

「あ、休むのは後だ。それじゃ、マイに包帯を巻くのを手伝つてくれ」

「……どこに巻くんでしょうか」

「マイは全身を怪我しているからな、まあ、全身だな」

「……！？　全身！？」

「なんだ？ 嫌か？ ビックリしたか？」

「い……いや……。ちよつと抵抗あるかなあ、と思つて……」  
「何で抵抗あるんだ？」

「この子、女の子でしょ！？ 俺にはちよつと……」

老人は、俺の言つた事が可笑しかったのか笑い出した。

「ハハハハハ！！ お前さんも結構純粹じゃわい！！ さあて、包帯を用意してくれ」

「は、はい！」

俺は包帯を用意して、老人に渡した。マイに包帯を巻きながら、俺は老人に言つた。

「あんたの名前、きいてなかったな。教えてくれよ」

「俺の名前……俺の名前は、ガンフ。これからは、ガンフ爺さんと呼んでくれ」

「ガンフ爺さん、これからもよろしく」

「ああ、よろしくな！」

俺達は、黙々とマイに包帯を巻いていた。

「ここからは、お前さんがやってくれ」

「え！？」

俺が驚いたのも、無理はない。なんせ、マイの胴体の部分だったから……。

「ガンフ爺さんがやればいいでしょ！？」

「いや、マイは、俺に身体を触られるのを嫌っている。この前擦り

むいた時も、『おじいちゃんはいいから!! 自分でやるから。』  
って言われてのお……………」

「…………俺でも同じだと思っけど……………」

「いいじゃろ。お互い身体を許した仲なんじゃろ?」

「…………!? そんなこと、してないよ!!」

俺達が話していると、うるさかったのかマイが起きた。

「…………此処、どこ?」

「マイ!! お前、大丈夫か!?」

「ライカ君…………。…………ごめんね、また心配かけちゃって……………」

「おお、マイ!! やつと起きたか!!」

「…………、おじいちゃん!? 此処って、診療所?」

「ああ、ライカ君がマイを運んできたんじゃ」

「…………アリガト。ライカ君……………」

マイはそう言うと、また顔を赤らめた。

「それじゃ、僕は疲れたからもう寝るわい。じゃあな」

「うん。お休み、おじいちゃん」

また、俺とマイの二人つきりになった。

「マイ…………。ゴメン! お前を、守れなくて……………」

「ううん、大丈夫。アタシの所に来るなんて、予想もしてなかったから……………」

「…………怖くなかったか?」

「怖かったけど、アタシ、この時は泣いてなかったよね?」

「…………ああ」

すると、俺が言葉を言い終えるや否や、マイが俺に抱き着いてきた。

「ウワッ!」

俺は、驚いて尻餅をついた。マイの顔を見ると、泣いていた。

「……でも、今は泣いていいよね?」

「……いいよ。一杯泣いても」

マイは、俺の胸の中で思いつ切り泣いた。そんなマイを、俺は力強く抱きしめてあげた。

「今度こそ、今度こそは、マイに怖い思いをさせないから……。マイを守ってやるから……」

俺も、マイと一緒に泣いていた。

数日後、俺とマイは買い物に出掛けていた。マイの傷（身体・心）も殆ど癒えた。俺達は楽しく笑いあっていた。

「ねえ、今日の晩御飯何にする?」

「カレーなんか良いんじゃないか？」  
「うん！ カレーにしようか」

俺達は、まるで新婚夫婦の様だった。こんな時間がずっと続けば良いなあ……。

しかし、現実には甘くない。俺は、またマイ以外の視線を感じた。

「……まただ」

「え？ どうしたの？ ライカ君……」

「またエージエントが来た！！」

マイは、もううんざりという表情だった。

「とにかく、俺について来い」

「うん。分かった……」

そう言っただけ俺は、マイの手を引っ張って全速力で走り出した。

「ヒヤッ!？」

「俺、中学・高校で陸上部だったから、走るのには自信あるんだ！」

「は……速いよお！」

「しっかり掴まってる!!」

俺とマイは全速力で走った。敵も追いついてこなかった。家に着けば、きつと無事だ。俺はそう思い、マイと一緒に風になった。

息も切れ切れで家に着くと、ガンフ爺さんが怪訝な表情で俺達に尋ねた。

「一体どうしたんだ？」

「敵に……追われてた」

「もうダメ……。疲れた〜！」

「どうやら、逃げ切れたようだ。しかし、いつ襲ってくるか分からない。油断は禁物だ。」

「さあて、昼飯でも作るかあ」

「ライカ君、料理できるの？」

「俺も作れるぞ、失礼な。いつも作ってもらってるから、お礼だ」

俺はマイのエプロンを借りて、台所に立った。そして、我ながら見事にできたハンバーグを皆で食べた。

「美味しい〜！！　すごいね、ライカ君！」

「まあな」

「お前さんは料理もできたのか！！　頼もしいのお〜」

「ライカ君のエプロン姿、似合ってたよ！」

「そ、そうか。ハハハハハ！！」

「ライカ君、ご馳走様。スツゴク美味しかったよ！」

「ああ、ありがとな！」

俺は柄にもなく照れていた。調子に乗って夕食にカレーを作ってみたが、これの評判も良かった。

「ライカ君、アタシの仕事、取るつもりでしょ」

「い、いや、そんなことないよ。マイが作ってくれた方が、俺のより美味しいよ！！」

「ホント？　ライカ君に言われると、嬉しいな」

「そうか」

そして、お互いに笑いあった。しかし、俺はつねに外の方に神経を集中させていた（でも、マイの話はちゃんと聴いている）。いつ奴らが襲ってくるか分からないから……。

その日の夜、俺はずっと起きていた。マイは、スヤスヤと寝ている。その寝顔が、月明かりに照らされてとても綺麗だった。

俺は狙われている。その事をしっかりと肝に命じ、時々コーヒーを啜りながら、夜通し起きていた。結局、俺はこの日は2時間しか寝なかった。

「どうしたの、ライカ君？ 顔色悪いよ」

この日の朝、俺はマイに言われて自分の顔を洗面所で見ただ。自分で言うのも何なのだが、かなり酷かった。頬はこげ、目にクマができていた。マイに心配されるのも無理ない。

「マイ、心配してくれてありがとな。でも、もう大丈夫だから」

「本当に？ 途中で倒れたりしない？」

「ああ、倒れたりしないよ」

「でも、心配だなあ……。何かあったら、遠慮せずに言ってね」

「ああ、分かった」

マイの話は聴いていたが、目は虚ろだった。この日も、また次の日も、俺は2時間程しか寝なかった。しかし、ついに限界がきた。

「ライカ君……。どうしたの？ さっきから変だよ……」

俺は、マイに言われても気付かなかった。意識なんて何処かに飛んでいた。

「ねえ、ライカ君……」

マイが俺を揺ると、俺はバタリと倒れた。

「……！！ ライカ君！？ ねえ！ ライカ君！！」

俺は自分のベッドで目覚めた。まだ頭がボオツとしている……。

「ああ、良かった……。ライカ君、いきなり倒れたからビックリしちゃった」

「……俺は……。一体……」

「もお、何かあったら遠慮しないで言ってね、って言ったのに……。おじいちゃんは、寝不足が原因だって言ってたよ。もお、我慢は体に毒だよ！」

「マイ……。ゴメン。俺って、何時間寝てた？」

「まだ3時間しか寝てないよ。もうちょっと寝てていいよ！」

「……ああ。でも、ちよつと飲み物を取ってきて良いかな？」

「アタシがいくから大丈夫だよ」

「うん、でも、マイにこれ以上は迷惑かけたくないから……」

そう言っつて、俺は部屋を出た。俺はコップに、少しの麦茶を注いだ。それを一気に飲み干すと、またベッドに戻って寝た。

「マイ、お休み」

「うん、お休み、ライカ君」

俺は眠りにつこうとしたが、横になってから何故か身体が動かな

くなくなった。

“ ああ……俺って、相当疲れてたんだな…… ”

心の中でこう思ってたが、寝返りがうてない。身体が石のように動かなくなったのだ。しかも、身体がピリピリと全身から痛みを発している。

“ ……！！これは痺れ薬だ！！ ”

口も痺れていて、言葉を出せない。マイに助けを呼べないのだ！！

俺が必死にもがいていると、俺の部屋の窓ガラスが突然割れた。そして、此処から黒服が現れた。俺は言葉を出せない。

「 ……！！ 」

すると、窓ガラスが割れた音を聞いたマイが駆け付けてきた。

「 ……！！ あんた、エージェントでしょ！？ 」

「 小娘には関係ない！！ 55号はもらって行くぞ！！ 八八八八ハ！！ 」

「 そうはさせない！ 」

そうやってマイは猟銃をエージェントに突き付けた。そして、躊躇いもなく腹に3発撃ち込んだ。エージェントは悲鳴をあげ、白く光って破裂した。マイは光で目が眩みながら、俺の所へ駆け寄った。

「 大丈夫！？ ライカ君！！ 」

しかし、俺は口が痺れていて言葉が出せない。マイは俺を、ガンフ爺さんの所へ連れていった。ガンフ爺さんは、俺の状態を見てすぐに異常が分かった。

「こりゃ、薬で痺れとる。何か飲まされたか？」

しかし、俺の口も痺れていて言葉を出せない。俺は、ウーウー唸っているしかなかった。

「お前さん、口も痺れとるな……。まあ、一週間もすれば治るぞ。それまで点滴を打っておいてやる」

“はあ、一週間も点滴生活かぁ……”

俺は暫く口がきけないので、心の中で思うしかなかった。突然、俺に睡魔が襲ってきた。俺はそいつに勝てず、深い眠りについた。

“……なんだ？ 俺の口の中がやけに甘い。唇には柔らかい感触が……。何だ？”

そう思っただけ目を開けると、俺の目にマイの顔がアップで写し出されてきた。

“……！？”

「あ、ライカ君！！……起きちゃった？」

俺は、マイに何をされたのか解らなかった。まだ口は痺れていて言葉は出せない。それにしても、俺の口の中がやけに甘い。幸い喉は動くので、俺の口の中の甘い物は飲み込む事ができた。

「じゃあね。ライカ君、お休み」

マイが俺に寄り添って寝た。俺に、再び睡魔が襲ってきた。またまた俺は、深い眠りについた……。

翌朝俺が起きると、マイの姿がなかった。しかし、台所からマイの鼻歌が聞こえたので、俺は安心して再び眠りにつこうとした。ふと、俺は気付いた。唇が重くない……。自分の意思で、口を開けるようになったのだ！俺は試しに、マイに向かって声をかけてみた。

「マイ、おはよう」

ビックリした様子でこちらを見たマイは、俺の所へ駆け寄ってきた。

「おはよう、ライカ君！！ やつと口がきけるようになったんだね！ やっぱり、おじいちゃんが出してくれた薬草は効くね！」

「……？ 薬草？ 俺、こんなもの飲んでないけど……」

「アタシがライカ君が飲みやすいようにして飲ませたんだよ。この薬草、普通に飲むととっても苦いの。でも、前もって噛んでおくと甘くなるんだよ……！」

「……ふーん……、つて、え！？ もしかして、マイが噛んで俺に……」  
「……うん。口移しして飲ませたんだ……」

俺とマイの顔は、真っ赤になっていた。

「……そ、そうか。あ、ありがとな」

「……ダメだった？」

「い、いや、治してもらったんだから、ダメなわけ無いだろ」

「そう……。でも、ライカ君の唇、とっても柔らかかったよ」

「……！？ そ、そうか？ マイの唇も柔らかかったけど……」

「えっ……！？」

「いや、なんでもないよ」

お互いに恥ずかしくなってしまったので、俺は話題を変えた。

「……昨日は助けてくれて、ありがとな！」

「いいよ。アタシだって必死だったし。ライカ君を……奪われたく  
なかったから……」

「えっ!？」

「いや、なんでもないよ!!」

更にお互いに恥ずかしくなってしまった。

「じゃあ、点滴のパック取り替えてくるから。待っててね」

マイは、奥へ行ってしまった。

「口移し、かあ……。あの甘い物はマイが咀嚼した薬草で、柔らか  
かった物はマイの唇かあ……」

俺は、床に伏せながら呟いた。もしかするとあの薬草は苦くなく  
て、マイが俺と口づけしたいが為に……。いやいや、何考えてんだ、  
俺！ここは、薬草は苦かったと考えておこづ。そうすれば、気が  
楽になる。俺も、マイも……。

一週間が経ち、俺の身体は脚以外は動くようになった（それでも、腕の動きは覚束ない）。しかし、一人では物を食べる事さえ誰かの援助が必要だ。でも、マイが俺のために、献身的になっている。

「ライカ君、お粥できたよ！」

「ありがとな。食べさせてあげるつもりだろうけど、もう大丈夫だよ。もう一人で食べれる」

そう言っただけ俺は、匙を手にした。しかし、身体がまだ痺れていて、手に力が入らない。匙はそのまま、俺の手をすり抜けて、虚しい音をたてながら床に落ちた。

「ほら、無理はいけないよ！！　ライカ君は病人なんだからね」

マイは匙を拾って、水でそれをよく洗ってから、俺にお粥を食べさせた。

「はい、アーンして」

「ちよっ……俺、子供じゃないんだよ！！」

「いいから、口開けて」

俺はマイにお粥を食べさせてもらっていた。まるでポケ老人だ……。俺は自分が情けなくなり、顔を真っ赤にした。

「ゴメンな、マイ。こんなにももらって……」

「ううん、いいよ。アタシもライカに沢山してもらっているから、そのお礼だよ！」

お粥を食べ終わった俺は、再び眠りにつこうとした。

「じゃあ、お休み。マイ」  
「お休み、ライカ君！！」

そう言ってマイは、俺の頬にキスをした。

「……………！？」

「フッフ、ビックリした？　じゃあね、また後でね」

マイは笑って部屋を出た。俺は放心状態になった。あの柔らかい  
感触が、再び蘇った。

“そうか、マイは俺の事が好きだからキスをしたのか”

そう思ったかった。

今更こんな所の話はしたくないが、『破壊組織』内は騒然としていた。12階の会議室で、ゲンがまた怒鳴った。

「一体エージェントは何をやっておるんだ!!」

すると、ゲンの前に軍曹と思われる人物が現れた。

「中将!! 報告します。55号は2人のエージェントを殺害。未だにF区に滞在中とのことであります!!」

「新手のエージェントを3人向かわせる!! 今度は連れ戻さなくていい!! 殺してこいと伝えておけ!!」

「はっ!!」

そして、軍曹は会議室を出た……。

あれから2週間経って、俺は完全復活した。俺は早速、マイの労いの為に料理を作った。

「おいし〜い!!」

「マイには世話になったからな」

すると、口がきけるようになった俺に、ガンフ爺さんが尋ねる。

「しかしお前さん、何で痺れたんだ？」

「多分、俺が飲んだ麦茶に薬が入っていたんだと思う」

「でも、ライカ君が元気になって本当に良かったね！」

「マイ、今まで助けてくれてありがとうな」

「どうぞ致しまして！」

俺達は、再び幸せな時間を過ごした。すると、奥の居間にある電話が鳴った。

「儂が出る。マイ達は食べてなさい」

ガンフ爺さんが居間に行った。数分後、ガンフ爺さんが戻ってきた。しかし、何故か焦っている。

「急患だ。かなり酷い怪我をしているらしい。マイ、手術の準備をすぐに運ばれてくるらしい」「うん、分かった」

そう言っつて、二人はすぐに手術室へ向かった。10分後、患者が運ばれてきた。俺は、見ていただけだった。

「お前さんは自分の部屋に行ってくれ。ここは儂らの仕事だ」

俺は言われた通り、自分の部屋に行った。手術室の中では、何が起こっているか分からなかった。

1時間後、ガンフ爺さんとマイが帰ってきた。

「手術は!？」

「大丈夫だ、成功したわい」

患者は二人いて、それぞれ少年と少女だった。二人はまだ麻酔が効いているのか、眠っていた。彼らは全身に包帯が巻かれている状態で、とても痛々しく写った。

「運ばれてきた時の状態はどうだった？」

「とても酷い怪我で、意識がなかったの」

「……そうか。まだ戦争は終わってないのか？」

「残念ながらそうみたい……」

マイは余程疲れていたのか、白衣のまま俺のベッドへ直行した。俺も、マイと一緒にベッドへ直行した。

翌朝、俺とマイはガンフ爺さんを手伝っていた。患者の点滴パツクを取り替えたり、採血をしたりしていた。

「患者の容態は？」

「今の所は安定しているわ。心電図も異常ないし」

すると患者が唸り声を発した。少年の方からだ。マイはいち早く駆け付けた。

「大丈夫ですか？」

「う……ん……。だ……大丈夫……」

「ダメですよ！ まだ動いちゃ」

「お〜い、マイ！ どうしたんだ！？」

「この子が動こうとするの。押さえ付けておいて」

俺は、少年をきつく押さえ付けた。彼は暴れたが、腕っ節は俺の方が上だ。彼は暴れるのを諦め、じっとした。そして、少女の意識も戻った。

「良かったあ〜。二人とも無事で……」

少女はまだ言葉を発しなかった。余程ショックな事があったのだろう。涙も流していた。マイは少女に語りかけた。

「ねえ、あなた。何があったの？ 泣いてちゃ、あなたの素敵な顔が台なしたよ」

少女は固く口を閉ざしていたが、マイに優しく諭されて口を開いた。

「……黒い背広を着た男の人が三人いて、『55号は何処だ！？』って言ったんです。アタシは『知りません』って言ったのに、いき

なり殴りつけられて、その時一緒に居たサイガ君も一緒に……。ウツ……ウツ……」

俺とマイは凍りついた。しかし、マイは動揺を隠し、別の質問をした。

「……そのサイガ君っていう子は？」

「……隣のベッドに居る男の子」

「あなたの名前は？」

「ミオよ。ミオ＝ミリア＝サイヴェリア」

マイは今度、サイガという少年に話し掛けた。

「あなたがサイガ君？」

「うん……。サイガ＝シード＝グリーズ」

「アタシはマイ。マイ＝マリア＝ルミエルよ。ほら、ライカ君も！」

「え！？俺も！？」

仕方なく、俺は軽く自己紹介をした。

「俺はライカ。ライカ＝ルーク＝ルインだ。短い時間だけど、よろしく！」

「うん、よろしく」

返事をしてくれたのは、サイガだけだった。ミオは俯いていた。余程人見知りが激しいというか、シャイな性格なのだろう。

「じゃあ、また後で来るからね！ライカ君、行こう！」

「あ、うん」

俺は、マイに連れられて部屋を出た。ふと、ミオの顔が見えた。  
俺の目には、ミオは心なしか顔を赤らめているように見えた。

俺とマイは昼食をとっていた。そこで俺達は、あの患者について話していた。

「……まさか俺が原因だったとは……」

「自分を責めないで、ライカ君……」

「……俺が55号だって、正直に言った方がいいかな？」

「うん……。アタシもそうした方が良いと思う。あの子達は、訳が分からず殴られたんだから……」

「それじゃ、行ってくる」

俺はサイガとミオが居る部屋に入った。部屋は静寂に包まれている。俺はその静寂を破った。

「あ、あの、ちょっと君達に話があるんだ」

サイガは俺を食い入るよう見つめた。ミオは相変わらず下を見て俯いている。

「君達は、『55号は何処だ！？』って言われたんだね？」

「は、はい。それが？」

俺は今になって言葉に詰まった。言おうか、言まいか、俺の頭の中でせめぎあっていた。

「ライカさん。どうしたんです？」

俺はサイガの声で我に返った。よし、もう言うしかない！

「その……55号が、俺の事なんだ」

俺がそう言った途端、サイガは信じられないといった表情で俺を見て、ミオは顔をあげた。

「何であなたが此処にいるんだ？」

「俺は組織を抜け出てきた。だから、俺は追われている……」  
「ウソよ……」

突然、ミオが叫んだ。俺とサイガは驚いてミオをみた。

「嘘よ……！ 絶対嘘よ……！ アナタがあんな野蛮な男達の仲間だなんて……！」

「おい、ミオ、落ち着け！ ライカさんは『組織を抜け出てきた』って言ったじゃないか」

しかし、ミオはサイガの言葉を聞かず、泣き出してしまった。あまりに突然の告白に困惑したのだろう。

「ライカさん、何で俺達が此処に運ばれてきたか知ってます？」

「え？ それは、殴られたからじゃ……」

「俺は、ね」

「じゃあ、ミオは？」

「レイプされかけた。幸い、やられる前に警察が来たから無事だったけど……。それでも、服を破られてかなり痛め付けられたけど」

「……そうか。ミオは何歳だ？」

俺は尋ねたが、ミオはまだ泣いている。俺が、こんなに年齢を気にするのは訳があった。幼いうちからレイプにあつたら、男性を信じられなくなる可能性がある。しかし、心のケアも幼いうちからすれば、きつと立ち直る、そう踏んでいた。

「まだミオには話し掛けない方がいい。因みに、俺は15歳」

俺は、ミオに寄り添って話し掛けた。ミオは身震いした。

「お、おい！ ライカさん……」

「大丈夫だよ、ミオ。もう助かったんだから。だから、泣かないで」

ミオは目を赤く腫らして、俺の方を見た。心なしか、頬も赤くなっていた。

「君は何歳？」

「……アナタから先に言つて」

「俺は18歳。もうすぐで19歳になる」

「アタシは、14歳」

「……マイと同じ年じゃないか！！ マイとは友達になれそうだな」

「……そうなの？」

そこで、マイがやって来た。

「何？ アタシの名前が聞こえたんだけど」

「このミオって言う子、マイと同じ年なんだって！」

「へえ〜。よろしく！ ミオちゃん」

「はい！ よろしくお願いします」

マイとミオは、すっかり仲がよくなったようだ。これで、ひとまず安心だ。

「ライカ君、そろそろ行こう。二人の身体に障るかもしれないから」  
「ああ、行こうか」

俺とマイが部屋を出ようとすると、サイガが俺に尋ねた。

「なあ、ライカさんとマイさんって、もしかして付き合ってる？」

俺は顔を真っ赤にして、マイと一緒に部屋を出た。

「なあんてね、冗談ですよ、冗談。ハハハ！！」  
「なんだ、冗談か……。ビックリした……。俺は胸を撫で下ろして、自分の部屋に行った。」

俺は、ミオの存在が気になっていた。何で俺と話すと、顔を赤らめるんだ？俺の見間違いか？

「ライカ君、入るよ」

俺はマイの言葉で我に返った。

「ねえ、ライカ君。ミオちゃんと何を話してたの？」

「……あの子、殴られただけじゃなくレイプもされかけたらしい。だから泣いてる、って」

「そう……。アタシと同じね」

「かわいいそうだな……」

マイの瞳は、潤んでいた。同じ事をされたから、ミオの気持ちが解るのだろう。

「でも、これからケアしていこう！ そうすれば、ミオもきつと立ち直る筈だ」

「じゃあ、その役目はライカ君に任せるよ。だって、アタシを助けてくれたから……」

「……よし、分かった。やるよ」

こうして俺は、ミオの心のケアをすることになった。

その日の晩、俺はサイガとミオに病院食を持って行った。

「美味しい！ こんな美味しい料理食ったの初めて！！」

「サイガ達は、此処に運ばれる前は、何食ってた？」

「俺達は戦争の孤児だからさ、ろくなもん食ってないよ。酷い時には5日間何も食わずに、ミオが栄養失調で倒れた時もあったな」

「……いつから孤児なんだ？」

「俺が7歳の時から。ミオは6歳。じゃあ、俺トイレ行ってくる」

「身体は大丈夫なのか？」

「うん、大丈夫」

そう言って、サイガは部屋を出た。俺はミオと話しはじめた。

「なあ、ミオ……」

「来ないで！！ あんな野蛮な男の仲間なんて来ないで！！」

ミオは泣いてしまった。俺は黙って引き下がるしかなかった。

俺はマイの所に行った。マイは俺の沈鬱な表情に反応した。

「どうしたの？何か問題でもあるの？」

「大有りだよ……。組織にいた人間を拒んでいるんだ」

「じゃあ、アタシが話してみるね」

そう言っつて、マイは病室に行った。ミオは、まだ泣いている。

「どうしたの？ ミオちゃん」

ミオは泣きながら答えた。

「……嫌いだ、ライカさんなんて、嫌いだ!!」

「どうして彼の事が嫌いなの？」

「組織の人間だから、アタシにまた悪さするかもしれない……。そう考えると怖いのに」

「彼は、そんな人じゃないんだよ。連れさらわれそうになったアタシを助けた事があるし、病気になったアタシを必死に看病してくれた事もあるし、レイプされかけたアタシを助けてくれた事もあるんだよ。ライカ君っつて、結構優しい人だよ」

「え！？……そうなんですか！？ や……。やだ、アタシ、ライカさんに失礼な事しちゃった……」

そう言っつて、ミオはまた涙を流しはじめた。

「泣く事ないよ。きっと許してくれるよ」

「あ、あと……」

「ん？何？ミオちゃん」

「アタシ、ライカさんの顔見ると、なんだかドキドキして、顔が熱くなるんですよ……。病気でしょうか？」

「うーん、病気じゃないと思うから、気にしなくて良いと思うよ。」

じゃあ、アタシはもう戻るから。お休み」

「はい！ マイさんも、お休みなさい」

マイは知らんぷりをしていたが、解っていた。

「ライバル出現、つてとこかな？ あ、ライカ君！！」

「どうだった？」

「ちゃんと心を開いてくれたよ。ライカ君に謝りたいって」

「そうか、良かったあ……………」

「あ、後……………」

「なんだ？」

「あの子、ライカ君に惚れてるよぉ〜！！！」

「え…………え！？」

「それじゃ、お休みなさい、ライカ君！！！」

「あ、ああ、お休み！！！」

俺はどきまぎしながら、ベッドに直行した……………。

俺は、夜中になっても眠れなかった。隣でマイがすやすやと寝ている。どっちをとるべきだろうか？ いや、絶対にマイだろう。しかし、やっと心を開いたミオが、再び心を閉ざしたらどうしよう……………。しかし、俺は考えているうちに眠ってしまった。

……暖かい。なぜだか暖かい。それに、体中が重い。目を開けて見ると、マイが俺に抱き着いていた。

「……………！？ わあっ！！！」

俺は素っ頓狂な声をあげてベッドから落ちた。

「い……………一体何のつもりだ！？」  
「ライカ君を奪われなくなかったの……………。ゴメンね、驚かせちゃって……………」

「い、いいよ。まだミオが惚れてるって限らないから  
「いいや！ 絶対惚れてるよ」  
「と、とにかく、俺から離れてくれ。動けないから……………」

マイは俺から離れた。

「じゃあアタシ、サイガ君達の様子を見て来るよ」  
「あ、俺も行くよ」

俺達が病室に行ってみると、サイガ達はまだ寝ていた。

「病院食、持ってきましたよー！！！」

俺がそう言うと、サイガは真っ先に起きて、いち早く飯にありつこうとした。その様子を見て、マイは微笑んだ。

「フフフ、可愛いね」

サイガが起きると、ミオも起きはじめた。ミオは、目の前に俺が居たので顔を真っ赤にした。

「ラ……ライカさん！？ あ、の、き、昨日はすみませんでした！」

「いいよ、気にしなくて。ちょっとビックリしたけど」

「ご飯、持ってきましたよ。ミオちゃん、昨日あまり食べてなかったでしょ。いっぱい食べてね！」

二人は、ちゃんと回復しているようだ。俺は、自分の部屋に戻ろうとした。しかし、ミオの声が俺を呼び止めた。

「待ってください！」

「ん？ どうしたんだ！？」

「私達は孤児なので、もう帰る所がありません。これからは、此処に居させてください！」

「……此処の責任者の爺さんに相談してくる」

俺はガンフ爺さんに、さっきミオが話した事を言った。爺さんは、賑やかになっていいだろうと言って許してくれた。

「此処に居ていいって。良かったな！」

「本当ですか！？ ありがとうございます！」

「怪我の方はどうですか？」

「まだ痛むけど、もう歩けます」

俺達が話していると、突然扉を叩く音が聞こえた。と、ガンフ爺さんの声が聞こえた。

「すぐに診察の準備をしてくれ」

どうやら、患者らしい。マイはすぐに診察の準備をした。勿論、俺も手伝った。患者は、20代後半の男だった。頭が痛むらしい。しかし、患者が現れた途端にミオの様子が変わった。ガタガタと振るえ、目を大きく見開いた。サイガが怪訝に思って、ミオに尋ねた。

「どうしたんだ!? ミオ!??」

「い……嫌」

「え!? なんだつて?」

「イヤアアアア! 来ないでええええ!!」

突然、ミオが泣きだした。まさか……。俺は患者に尋ねた。

「お前、エージェントか!??」

「何の事ですか? エージェント? 何を言っているんですか?」

すると、ミオが男に向かって叫んだ。

「こいつよ!!! アタシをレイプしかけたのは!!!」

男は凍りついた。男は、鬼の形相でミオに近付いた。

「テメエ、此処に居たか!!! もう一度やってやるつか!??」

「イヤアアア!!! 止めてえ!!!」

「やめろお!!!」

叫んだのは、サイガだった。サイガの腕は、何故か膨張している。

「テムエは……この前のクソガキじゃねーか。殺されたいのか!?  
あ!？」

エージェントが言い終わるや否や、サイガは膨張した腕でエージェントを掴み、遠くに投げた。エージェントは悲鳴をあげながら飛ばされ、グシャリという音と同時に息絶えた。

「もう大丈夫だよ、ミオ。あいつは、いなくなった」

サイガは、その大きな腕でミオを包んだ。ミオは、声をあげて泣きだした。

「ここはひとまず出ましょ。ライカ君……」

「ああ、そうだな」

俺達は、一旦部屋を出た。サイガとミオの二人の時間をつくつてやりたかったから……。

「アタシ達と一緒にだね!」

「そうだな。状況まで似てるな」

俺達は、自然と手をつないでいた。マイの手は暖かった。マイは笑って俺と話している。そんな時間が、俺にはとても愛おしかった。



しばらくして俺が昼食を持って行くと、サイガとミオは笑いながらお喋りをしていた。サイガの腕は、元に戻っていた。俺はさっきの腕の膨張について、サイガに尋ねた。

「なあ、さっきの腕って、一体……」

「ああ、それね。俺は特殊な民族の生まれなんだ」

「特殊な民族？ それと何の関係が？」

「ああ。この国の民族は二種ある。一つは、『シルバ族』。ミオはこの民族だ。この民族は普通の人間だ。そしてもう一つは『バーストバルク族』だ。俺はこの民族だ。この民族は好戦的で、怒ると腕が膨張する特殊な民族だ。でも……」

「でも……なんだ？」

「俺達の民族はシルバ族に迫害され、ついに10年前民族紛争が起こった。そこで俺とミオが出会った。俺とミオの家族は死んだ。最初は俺はミオの事が嫌いだったけど、一緒にいるうちに民族なんかどうでもよくなって、こうしてずっと一緒にいる」

「アタシ達は、ずっと国中を歩いた。風邪を引いたり、栄養失調になったり、いろいろとあった。でも、人の優しさに触れる事はなかった。アタシ達に優しくしてくれた人は、ライカさんとマイさんだけです。ありがとございます！」

「どう致しまして。ミオ、さっきは大丈夫だった？」

「はい、もう大丈夫です」

「そうか、それじゃ、ここに昼食を置いてくから」

そう言って、俺は部屋を出た。二人は体だけじゃなく、心まで回

復しているようだった。ベッドから出る日も近いな……。

夕方になり、俺とマイが夕食を持って行くと、二人は寝ていた。それも、手をつなぎながら。二人の寝顔は、とても可愛かった。

「もうこの二人は、恋人みたいだね」  
「そうだな」

俺は二人分の夕食を、テーブルにできるだけ音を立てないように置いた。二人は、とても幸せそうだった。

「じゃあ、アタシ達は部屋に行きましょう。この二人の幸せな時間を崩したくないから……」

「羨ましいな、あの二人は」  
「本当にそうだね。アタシ達も、あんな風になりたいな」  
「マイ、もうなってるじゃないか」  
「えっ？」

マイは顔を赤くした。俺の顔も、赤くなっていた。

「俺達、もう恋人同士だろ？俺がマイの事が嫌だったら、俺はあんな返事はしなかったよ」

「……うん！ そうだね、アタシ達、もう恋人同士だよね！」

俺はマイの手を握っていた。マイも、俺の手を握り返していた。俺達は、サイガとミオと同じくらい幸せだった……。

サイガとミオが起きたのは、それからすぐだった。

「おっと、昼寝のつもりが寝過ぎしたな……。あ、ミオも起きたか？」

「うん、サイガ君。あ、手つないで寝ちゃったね……」

サイガとミオが顔を赤くしているところへ、俺達が入ってきた。

「体の調子はどうですか？」

「あ、もう大丈夫です。体も痛くありません」

「夕食を置いていたから、食べてくれ」

「やっと飯だ！！」

サイガはいち早く夕食に飛びついた。

「もう戻ろつか。ライカ君」

「ああ、そうだな」

俺達が戻ろうとしたとき、ミオがマイに尋ねた。

「マイさんって、ライカさんの事どう思ってるんですか？」

マイは言葉に詰まったが、考えた末にこう答えた。

「ひ・み・っ！」

「え〜!? そんな〜!! ずるいですよ〜!!」

「じゃあ、何か困った事があつたら言つてね」

そう言つて俺達は、そそくさと部屋を出た。

「何か感づかれているよな。正直に言つた方がいいかもしれない」

「ダメよ。ミオちゃんはまだライカ君の事を諦めてないのよ」

「だからといって、そのまま話さないのも残酷だろう」

部屋に戻ると、俺達は話し合っていた。しかし、話は平行線だった……。と、そこで、ナースコールが鳴った。

俺達が見に行くと、サイガとミオの姿はなかった。夜の風が、部屋の中に吹き付けていた。しかし、此処は窓は開かないようになっている。よく見ると、窓が破られていた。俺とマイは凍りついた。

「マイは外に居ろ! 俺が見てくる!」

そう言つて俺は、チェーンソーを持って外へ出た。何か嫌な予感がする……。

俺が外へ出ると、すぐに縛られているサイガとミオが見えた。

二人はさるぐつわを噛まされて、ウーウー唸っている。二人は俺に向かつて首を大きく振った。二人の足元をよく見ると、土の色が微妙に違う。俺は、落とし穴があるとすぐに分かった。俺は後ろに回り込み、二人の縄を解こうとした。しかし、すぐにミオがエーリエントに連れさらわれた。サイガは、縄が解けたのですぐエーリエントに飛びついた。そして、エーリエントを膨張した腕で殴り、たたき付けた。エーリエントは内臓破裂で息絶えた。

「大丈夫か!？」

俺は、ミオの縄を解いてやった。さるぐつわはサイガが取ってやった。ミオは泣き出し、サイガに抱き着いた。サイガも、躊躇う事なくミオを抱いていた。

「お熱い所申し訳ないけど、戻ろうか」

俺が言っても、二人の耳には入ってないらしく、俺は一人でトボトボと退散した……。すると、すぐにマイが駆け付けてきた。

「あの二人は？」

「あそこで熱くなってるよ」

「そう……。もう言っていないかもね」

「あの二人が落ち着いてからな」

マイは、遠くの二人に声をかけてみた。

「二人共、戻らないと風邪引いちゃうよ」

遠くから返事が聞こえてきた。俺達は先に部屋へ戻った。二人が戻ってきた時には、PM10時を過ぎていた。

翌日、サイガとミオの体は完全に治っていた。

「やっと退院だ!」

サイガは嬉しそうに跳びはねていた。サイガがトイレに行くと、マイはミオを呼び出した。

「何ですか?話って」

「ミオちゃんは、ライカ君の事どう思ってるの?」

「……それは……、頼りになるなあ、と思つてます……」

「ミオちゃん、この前、『ライカさんを見ると胸がドキドキする』つて言つてなかったっけ?」

「え……え!? そ、それは……」

「ライカ君の事、好きでしょ?」

「と、とんでもありません!! ア、アタシが好きな人は……」  
「だあれ?」

「……サイガ君です……」

しばらく沈黙が続いた。と、そこに、サイガが帰って来た。

「マイさん、ミオ。どうしたんです?」

「ほら、ミオちゃん、チャンス!!」

ミオは腹を決めたのかサイガに話し掛けた。

「あの……、サイガ君……。ちょっと話があるの」  
「ん？ なんだ？」  
「アタシ、サイガ君の事が……。好きだったの……」  
「え！？ マジで！？ おいおい、両想いかよ……」  
「え！？ 今なんて……」  
「俺も、好きだったってコト！」  
「なんだ……。早く言ってよ。ウワァァン！！」

ミオは笑いながらサイガに抱き着いていた。顔では笑っていたが、涙は止まっていなかった。

「ハハハ、ミオは泣き虫だなあ」  
「そんな事、ないよ、うっ、うっ！」

ミオはいつまでもサイガを抱いていた。

「さて、悪いけどベッドを片付けてくれるかな？」  
「分かりました」  
「俺も手伝うよー！！」  
「ライカ君！！ じゃあ、ベッドを分解してね」

俺達（4人）はベッドを片付けた。そして、俺達の共同生活が始まった……。

その日から俺達は、寝食を共にした。風呂も、男同士・女同士でそれぞれ入った。サイガとミオは、マイが寝ていた部屋で寝た。

「賑やかになったね。ライカ君!!」

「そうだな、うるさい位だなあ」

「あの二人、元気いっぱいだからね」

「じゃあお休み、マイ」

「お休みなさい、ライカ君……」

俺達は互いに寄り添って寝た。隣の部屋からは、もうサイガとミオの寝息が聞こえてきた。これで何日目だろうか、こんな幸せな時間がずっと続けばいいと思った。

次の日、俺達は買い出しに出掛けていた。幸いそれは無事終了し、何事もなく家に帰る事ができた。

「今日は、俺が料理作るよ!!」

言い出したのは、サイガだった。

「サイガ君、料理できるの?」

「ああ、できるさ。ミオと一緒に料理作った事あるから。なあ、ミ

オ

「うん！ サイガ君の料理、結構美味しいよ！！」

「へえ〜！ じゃあ期待して良いんだね」

「任せといて下さい！！」

暫くして、サイガが料理を運んできた。食べてみたが、味もなかなかのものだった。

「すごく美味しいよ！！ サイガ君！！」

「皆にそう言ってもらったら嬉しいよ」

食事の最中にミオがマイに質問した。

「あ、そういえば、マイさんってどこで寝ているんですか？」

「ライカ君の部屋だよ」

「でも、ライカさんの部屋にベッドは一つしかなかった筈……」

「二人で一緒に寝ているの。ライカ君が許してくれたからね」

「あ、もしかしてライカさん、マイさんの事好きでしょ？」

「え……え！？」

話の矛先が俺に向かってきたので、俺はビックリした。

「そ……それは……」

「凶星ですね！」

「い、いや……」

俺が言葉に詰まったとき、マイが口を開いた。

「アタシが……ライカ君の事を好きだったの」

数秒後、部屋に絶叫が響き渡った。

「ええええええええ!?!」

「マジっすか!?!」

「そんなに驚く事ないじゃないか……」

その時、ミオがつぶやいた。

「ライカさん、優しかったからなあ……」

その言葉からは、諦めや寂しさ、悲しみも含まれていた。沈鬱な表情をしていたミオに、マイは怪訝に思い尋ねた。

「どうしたの? ミオちゃん?」

「あ、いいえ、何でもないです……」

「そっだ!! 折角4人になったからさ、今日は4人で一つの部屋で寝ようぜ!!」

「お、サイガ、良い提案だねえ! マイとミオはどうする?」「アタシはOKよ。ミオちゃんは?」

「い、いいですね! やりましよう!」

「決まりだな! じゃあ、俺達サイガ・ミオが寝ている部屋で寝ようぜ!!」

その夜俺達は、元々マイが寝ていた部屋に来た。ちゃんと4人分の布団が敷かれていた。

「じゃあ、皆お休みなさい」

電気が消えると、俺の身体が何故か重くなった。そして、誰かに押し倒された。

「……………誰だ？」

暗闇に目が慣れてくると、人の形が浮かび上がった。マイだろうか……………。しかし、よく見てみるとミオだった。

「……………！？わあっ……………」

「大声出さないの。皆起きちゃっよ」

「ミオ……………。一体何を……………」

「アタシね……………、サイガ君が好きなんだけど、ライカ君も好きなんだ……………」

そして、俺の唇にミオの唇を近付けた。

「うわわっ、サイガにしてやれよ！！ 此処にはマイもいるし……………」

「……………アタシよりマイさんの方が大事なの？」

「……………！？ そ、それは……………」

「やっぱり……………。マイさんの方が大事なんだ……………。ウツ、ウツ……………」

大変な事になった……………。ミオが泣いてしまった……………。俺が泣かせたのか！？ いや、そうだ。俺が泣かせてしまった……………。

「……………どうしたの？ ミオちゃん？」

まずい！ マイが起きてしまった！ しかしミオは何でもないと  
言う風に黙っていた。しかし、黙っては居ずにすぐに俺の所へ向き  
直った。

「……嘘泣きですよ。慌てているライカさんも可愛いですね！ じ  
ゃあお休みなさい」

俺はひとまず安堵した。しかし、口づけをしようとしたのは本気  
だろう。俺が寝ようとする、ミオの睨り泣く声が聞こえた。今度  
は本気で泣いている。

「……どうしたの？ ミオちゃん？」

するとミオは、マイに向かって飛び込んできた。

「ワアアアアアン！！ アタシ……。アタシ……」

「あらあら、泣かないの、ミオちゃん。どうしたの？」

「またライカさんに酷い事しちゃったあああ！！」

「なあに？」

「アタシ、ライカさんが嫌がってるのにライカさんにキスしようと  
したの……。それで……。ライカ君アタシから遠さがって……」

「いきなりしようとしたら、誰でもビックリするよ。気にしない  
で！！ それに、サイガ君爆睡してるから今サイガ君としちゃえば  
？」

「……はい」

そう言ってミオはサイガにキスをした。

頬ではなく、唇にしたのだ。それがミオとサイガのファーストキスになった。

「ミオちゃん、良かったね！」

「……うん！」

「じゃあお休みー！」

「お休みなさい！」

そして、起きている者は俺だけになった。退屈に思っていると、何処からか声がした。

「ライカ君……。起きてる？」

「ああ、起きてるよ。何だ？ マイ」

「本当に羨ましいね……。あの二人の関係って……」

「……キスしたいのか！？」

「そうじゃなくて。アタシは、ライカ君と一緒にいる事が一番の幸せなの」

「……そうか、ありがとな」

「でも……」

そう言ってマイは、俺の横に寄ってきた。

「やっぱり、ライカ君と……キス……したいな……」

「……良いぞ」

俺達は、唇を合わせた。今度は頬ではなく、唇に唇を合わせた。

マイのキスは優しくかった。俺も、マイに合わせて優しくした。キスをした後は、お互いに暗闇でも分かる程に顔が真っ赤になっていた。

「じゃあ、お休みなさい。ライカ君……」

「ああ、お休み……」

こうして俺は、今度こそ眠りについた。時計を見ると、午前0時を過ぎていた……。

t h i r t e e n

次の日、俺達は部屋の掃除をしていた。中心となっている人は、マイだった。

「ライカ君！！ この袋は外に出して。ミオちゃんは、雑巾がけをお願い。サイガ君は窓を拭いて」

マイの的確な指示の下俺達は掃除をやった。他人の命令に従ったのは何年ぶりだろうか……。すると、すぐにマイの叱責が飛んできた。

「ライカ君！！ ボサツとしないの！！」

「あ、ああ、分かった。そんなに怒るなよ……」

俺がもしもマイと結婚しても、こうやって尻にしかれるのか……。い、いや、何言ってるんだ、俺！ まだ結婚できないだろう！ それに、こんな事考えただけでも恥ずかしい！

「ライカさん、どうしたんだい？ 顔、赤いよ」

「い、いや、何でもないよ……」

そう言っただけ俺は、再び黙々と掃除を続けた。

「はあ……」

「どうしたんですか？ライカさん。昨日の事考えていたんですか？」

「いや、昨日の事は気にしてないよ」

「昨日はごめんなさい！！ アタシ、ライカさんの気持ち考えずに……」  
「大丈夫だよ。もう気にしてないから」  
「本当ですか!?!」  
「ああ」

俺がそう言うと、ミオが俺に抱き着いてきた。

「お……おいおい。サイガにはしなかったのに……」  
「サイガ君にはもうしました。サイガ君、アタシがこうしたら顔真っ赤になりましたよ!」  
「悪いけどミオ、掃除ができないから退けてくれ。またマイにどやされるのは御免だからな」

俺がそう言うと、ミオは素直に退けてくれた。俺は再び黙々と掃除を続けた。いつまで経っても終わらない……。

「俺、ごみ袋だしてくるよ」  
「いつてらっしやい!」

俺は埃だらけの体で外に出た。しかし、何故か空気が張り詰めている。

すると、俺の横から銃弾が飛んできた。俺は、間一髪で避けた。エージエントだと、すぐに分かった。

「くそ！ エージエントか!?!」  
「よく分かったな」

俺は義腕を取り外してチェーンソーに付け替え、エージエントに

襲い掛かった。しかし、エージェントは小銃を持っており、迂闊に近付けば撃たれる。ふと、エージェントが小銃をしまった。

チャンス!! そう思ったが、突然背中に激痛が走った。ナイフが一本刺さっていた。俺はくぐもったうめき声をあげて倒れた。

「く………そっ!!」

俺は力を振り絞りエージェントにチェーンソーで襲い掛かったが、腹を撃たれてまた倒れた。

「ああああああ!!」

これまでか……。万事休すだった。しかし、小銃を持っていたエージェントが突然倒れた。目の前には、サイガがいた。サイガはビツクリしている。

「大丈夫ですか!？」

「見ての通り大丈夫じゃねーよ……ウグツ!!」

「大変だ!! 早く連れて行かないと……」

「そうはさせねーぞ!!」

エージェントは俺の首にナイフを突き付けていた。

「死ねえ!!」

「ライカさん!! 危ない!!」

俺、死んだのか……。そう思って目を開けて見ると、サイガの背中にナイフが突き刺さっていた……。

「サ……サイガ？」

サイガは大量出血で倒れた。エージェントは、苦虫を噛み潰したような顔でサイガを見た。

「今度こそ殺す！！ 死ねえ！！」

エージェントがそう言った瞬間、俺の何かがプツリと切れた。

気が付くと、エージェントの血まみれの四肢が転がっていた。俺はすぐに、虫の息になっているサイガを診療所へ連れていった。

俺とサイガは共に治療を受けた。幸い俺達は助かったが、サイガはまだ意識が戻らない。

「サイガ君……早く起きてよ……。いつまで寝てるの？ ウツ、ウツ、ウツ……」

ミオは泣き出してしまった……。

「ライカ君……。どうしたの？」

「エージェントに襲われた。サイガは俺を庇って……。こうなった」

ガンフ爺さんは深刻な表情をしている。

「血は足りている筈だから、もうじき起きるよ。安心なさい」

「……はい」

「くそ、俺がちゃんとしてれば……」

俺は、何もできない自分が情けなかった。俺はついに、涙を流してしまった……。堪え切れない涙が、どんどん溢れていった。

「ウワアアアアア！！ 畜生！！ 畜生！！ 畜生！！」

俺は、うずくまって泣き叫んだ。

「ライカ君……」

その様子を見ていたマイは、うずくまっていた俺を立てさせて俺を抱きしめた。

「可哀相なライカ君……。大丈夫だよ。もう淋しくないからね……。サイガ君はきつと生きてるから……」

マイは、俺の頭を撫でながら優しく言った。俺は呆然と立ち尽くした。涙は、いつの間にか止まっていた。

「悲しい・悔しいのは皆一緒だから、ライカ君一人がいつぺんに背負っちゃダメだよ……。ライカ君は一人じゃないから……。アタシ達も一緒だからね……」

俺はマイの言葉に胸が熱くなり、噎り泣いた。

「さあ、後はおじいちゃんに任せましょう」

マイはそう言って、俺達を部屋から出した。俺は部屋で一人泣いていた……。

俺は泣き疲れて、いつの間にか寝ていた。目を覚ますと、目の前にマイがいた。

「俺……マイに情けない所見せちゃったよ……」

「そんな事ないのよ！ 泣く事は恥ずかしい事じゃないから。それより、サイガ君が目を覚ましたよ……」

「ほ……本当か！？ 良かったあ……」

俺は立ち尽くしていた。心の中は、安堵の気持ちとサイガに対する罪悪感でいっぱいだった。俺はすぐにサイガの病室へ急いだ。

「サイガ！ 起きたのか！？ 大丈夫か!？」

「……まだ痛むけど、もう死ぬことはないです……」

俺はその場でへたりこんで泣いた。

「良かった……良かった……」

「何……泣いてるんです？ ミオのが伝染したんですか？」

俺は胸に溜め込んだ気持ちを、涙として全部流した。

「ライカ君……。もう泣かなくていいのよ」

「ほら、愛しの彼女からも言われていますよ……」

「う……うるせえ……」

サイガとマイはクスクスと笑った。すると、ミオが走ってきた。

「サイガ君！？ 大丈夫！？ アタシの事……分かる？」

「分かるよ……。ミオだろ？」

「……寂しかったよお……。ウワアアアン！！」

そう言ってミオは、サイガに抱き着いた。サイガも、泣いているミオを優しく抱きしめた。

「フフフ……。あの二人、なかなかお似合いだね。もしかして、このまま結婚したりしてね」

「そうか？」

「きつとそうだよ！」

そう話しながら、俺達は病室を出た。気付けばもう夕方だった。夕日がサイガとミオを優しく照らした。俺とマイは、手を繋いで部屋に行った。

こんな所を思い出しただけでもはらわたが煮え繰り返るが、『破壊組織』は、またもや騒然としていた。

「……55号は！？」

ゲンが怒鳴った。衛兵は、ゲンに恐れおののき言った。

「まだです！！ エージエントは3人全員死亡！！ 次のエージエントを……」

「もっいいい！！ 俺が行く！！」

「し……しかし……」

「黙れ！！」

そう言っつてゲンは、拳銃を抜き放ち、衛兵を撃ち殺した。

「へりを用意しろ」

周りの奴らはゲンに恐れおののき、二つ返事でへりを出した。そしてゲンは、俺の所へと向かった……。

今日も、雨だった。鬱々とした天気、こっちも鬱々となっている。こここのところ、5日連続で雨が降っている。

「はあ……。今日も雨かあ……」

「そんなに落ち込まないで、ミオちゃん！ こんな時は読書だよ！

晴耕雨読だよ！」

「はい、そうしましょうか」

俺は何か危ない物を感じ取った。嫌な予感がする……。

「俺、ちよつと散歩行ってくる」

「え？こんな雨なのに？」

「……ああ、ちよつとな」

「変なの……。気をつけてね！」

俺は雨の中、街を歩いた。特に買い物をする訳でもなく、ぶらぶらと歩いていて。すると、何処からか戦車が走る音がした。要塞のように、巨大な戦車だった。人々は逃げ回り、パニックになっていた。

「まさか……」

俺は凍りついた。それには、『破壊組織』の紋章が付いていた。明らかに、俺を狙っている！！俺は戦車の上に飛び乗り、チェンソーで主砲を叩き切った。主砲は大きな音を立てて地面に落ち、俺は更に畳み掛けようとした。

「オラアアアアアアアア！！！」

俺は叫びながら戦車を叩き切るうとした。

『退却する！ これより退却する！』

しかし戦車は逃げ、俺は静かになった街に一人取り残された。俺はずぶ濡れになりながら、戦車を追いかけた。

「待てええええ！！」

しかし戦車は、戦車とは思えない速さで退却した。

「ハア、ハア、ハア……」

俺は、そのまま家路についた……。何故だ……。あの戦車には何故ゲンが乗っていたのか……。あいつが死ねば、組織は壊滅する。最終決戦なのか……。奴らも切羽詰まっているのか！？

「面白れえ……。やってやるよ！！」

俺は覚悟を決めた。もうここまで来たらやってやる！！



俺が診療所に帰って来ると、3人は俺を見て驚きを隠せなかった。

「ラ……ライカ君、どうしたの!? そんなにずぶ濡れで!!」  
「奴らが……来た」

「もう嫌よ!! ライカさん、なんとかならないんですか!?!」

「奴らと……戦うしかない!」

「そんな……。もうライカさんとサイガ君が傷つくのは嫌!!」

「いや、奴らを壊滅させるチャンスはある!!」

「チャンスって……。何です? 俺にも出来るんですか?」

「落ち着け! サイガ。これは奴らを倒す最後のチャンスだ。よく聞け」

「最後のチャンスって……。どういう事ですか!?!」

「失敗すれば、俺らは確実に死ぬ。ただし、成功すれば、組織を確実に壊滅させる事が出来る」

サイガは凍りついた。目を見開き、身体が震えていた……。

「失敗すれば……死ぬ……」

「組織のドンが、戦車の中にいたんだ! そいつさえ倒せば、組織は壊滅する」

「でも、奴らは確実にライカさんを殺しにかかっているんだろ?」

「その通りだ。だから失敗すれば……死ぬ……」

暫く沈黙が続いた。皆、どうすればいいのか考えていた。しかし、その沈黙は破られた。マイが口を開いたのだ。

「アタシはライカ君の事信じてるから……。行ってらっしゃい。でも、必ず生きて帰って来てね……」

「マイ……」

マイは泣きそうな表情になっていた。すると、ミオも口を開いた。

「サイガ君、生きて帰って来なかったら、許さないからね!!」

「ミオ……。分かった。必ず生きて帰って来るよ!!」

ミオは、もう泣いていた。苦渋の決断だったに違いない……。

「ライカさん。俺、ライカさんと一緒に行くよ!」

「サイガ……」

俺は胸が熱くなった。そして、俺はサイガを抱きしめた。

「……うわっ!!」

「ありがとう……」

俺はサイガから離れると、泣き出していた。

「皆……本当にありがとう!!」

「何言ってるの? ライカ君……。お礼を言うのはアタシ達の方だよ。ライカ君のおかげで此処まで来れたんだから……」

そして、マイは俺を抱きしめた。

「大好きだよ……。ライカ君……」

俺は泣くのを止め、マイの頭を撫でてあげた。

「マイ、ミオ。行ってくるよ……」

そう言っただ俺達は、診療所を出た。

「待って!! ライカ君!!」

「もう行くの? サイガ君……」

しかし俺達は、振り返らずに雨の中を歩き始めた。これがお別れになると思つと、嫌だった。

「マイ、必ず生きて帰って来るから……」

街は騒然としていた。市場は荒らされ、人々はバタバタと倒れている。組織の奴らは、一般人にも容赦なかった。

「酷<sup>ひで</sup>え……」

俺達が暫く歩いていると、あの戦車が見えた。

「あれだ……。行くぞ、サイガ!!」

「はい!!」

戦車の周りには、衛兵がうじゃうじゃといて、正面突破は困難だった。

「殺しますか？」

「それしかないだろう……。行くぞ！」

俺はチェーンソーを振り回し、サイガは大きな腕を振り回して突入した。

「ウオオオオオ!!」

俺達は雄叫びをあげながら、敵を蹴散らしていった。衛兵は、全員死亡した。これで、突破口が開けた。俺達は、戦車の中へ突入した。

戦車の中も、衛兵で溢れていた。しかし俺達は、衛兵を殺さず、尋問をしていた。

「くそ、ゲンは何処だ!？」

「一番奥の、指令室だ……」

「そうか」

俺は、衛兵の首を切った。衛兵は、苦悶の表情で死んだ。

「指令室へ行きましょう！」

「ああ」

俺達は、指令室へと急いだ。これで決着がつくと思うと、俺達の足は速まった。衛兵達は薙ぎ倒し、俺達は傷一つ付かずに指令室へ

向かう事が出来た。

俺達は、指令室にたどり着いた。そこには、ゲンが銃を構えて立っていた。

「55号。やっと戻って来たか」

「黙れ！！ もうあんたの部下ではない！」

「ほほう、ならば……」

そう言っただけで、俺の腹を銃で撃った。俺は吹っ飛び、ガクリと倒れた。

「ライカさん！！」

「小僧、次はお前だ！」

ゲンはサイガに銃を向けた。しかし、銃は真っ二つに割れ、虚しい音をたてて落ちた。

「終わりだ！！」

「ば……馬鹿な！！ 貴様は撃たれた筈……」

俺はゲンに、撃たれた所を見せた。ゲンは凍りついた。

「ぼ、防弾チョッキ……だとお!？」

「ああ、衛兵から盗んだ物だ」

「もう、諦める!！」

しかし、ゲンは不敵な笑みを浮かべている。

「何が可笑的い!？」

サイガが叫ぶと、ゲンは何かのボタンを押した。その途端、アラームが大音量で鳴った。

「ハハハハハ!！ この戦車は、あと5分で大爆発する!! 組織と共に散れえ!！」

俺達は凍りついた。早く逃げなきゃ……。

「サイガ!! 早く逃げるぞ!!」

「はい!！」

するとゲンが、口を挟んできた。

「無駄だ! あと5分で大爆発するんだ! 逃げられる筈はない!」

「うるせえ!! 黙れ!！」

サイガが一喝すると、俺達は走り出した。あと4分……。衛兵の屍に足をとられながらも、俺達は突き進んだ。

「絶対に生きて帰ってやるから……。マイ……」

制限時間はどんどん短くなっている。あと3分……。

「あとどれ位だ!?!」

「此処を曲がれば出口です!?!」

俺達は、角を曲がった。しかし、俺達は凍りついた。厚い鉄のドアが立ち塞がっていた。あと2分……。俺達は、精一杯頑張った。しかし、びくともしない! そうこうとしているうちに、制限時間はあと1分になった。

『あと、1分。あと、1分』

「畜生!?! 畜生!?!」

「サイガ!?! まだ諦めるな!?!」

あと30秒……。すると、鉄のドアにひびが入った。

「行けるぞ!?! サイガ!?!」

残り20秒……。しかし、ひびは入ったが、まだ破れない。俺達は、汗だくになりながら必死に攻撃した。残り10秒……。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオ!?!」

『9・8・7・6・5・4・3……』

「諦めるなああああ!?!」

その時、鉄のドアが遂に破られた。外の光が、俺達を明るく照らした。

「やった……」

『1・0』

俺達は、猛烈な爆音・爆風・閃光に包まれた。俺達は、周りが見えなくなった……。えなくなった……。



「サイガ君……」

二人は、祈り続けた。どうか無事で帰って来ますように、と……。

……あれ？ 俺達、生きてる……？

「……ハッ！！ 此処は……何処だ！？」  
「気が……付きましたか。ライカさん……」

俺達が倒れていた所は、焼け野原だった。何も無い、俺達しかない所だった。

「まさか……」

「心配ないですよ。ほら、向こうに集落があるでしょう。俺達の間集落ですよ……」

「早く、戻ろうか」

「はい。ミオも、マイさんも、目茶苦茶心配していると思うから……」

俺達は、傷ついた身体を引きずるように前へ進んだ。マイが心配していると思うと、俺の足は速まった。

「待っていてくれ……。マイ……」

マイとミオは、ただ祈り続けていた。しかし、二人は帰って来ない。それでもマイとミオは、帰って来る事を信じて祈っていた。

「お願いします、神様、どうかあの二人が無事でいますように……」  
すると、何処からか足音が聞こえてきた。

「まさか……」

ミオは、いち早く外に出ていた。ミオは目を疑った。ライカとサイガが、戻って来たのだ!!

「マイさん!! 来て下さい!! ライカさんとサイガ君が……」

二人はボロボロになりながら帰って来た。マイとミオは、涙を流していた。

「お帰りなさい、ライカ君……」

「……ただいま。マイ……」

俺は、その場に倒れ伏した。

「ライカ君！？ 大丈夫！？」

マイは、俺を診療所へ運んだ。ここから、俺が起きるまでの記憶はない。ただ、俺が倒れる前に、サイガとミオが抱き合っていたのは覚えている……。

御静聴有り難う。此処までが、俺が語りたかった話だ。え？  
のあとは、どうなったって？ 仕方ねえ……。話してやるよ。そ

俺は事実上、職を無くした。だから俺は今、近所の市場でアルバイトをしている。サイガとミオも一緒だ。マイは、俺が目覚めてから、看護師になりたいって言ったから、看護師になるための勉強をしている。あと1年勉強すれば、国家試験を受ける事が出来るらしい。

まあ、余談だが、マイが看護師になったら俺は………マイと結婚しようと思っている。マイの方から言ってきた。俺がOKを出したら、マイは泣く程喜んでた。

おっと、マイが呼んでるから、俺はそろそろ行くよ。じゃあな。またいつか会おう!!

## Final! (後書き)

これで、本編は終了です。次話はキャラクター紹介などです。

**characters & keywords (前書き)**

ネタバレを含みます。先に本編をどうぞ。

## characters & keywords

キャラ

ライカ＝ルーク＝ルイン

性別・男

年齢・21（物語終了時）

髪の色・茶色

瞳の色・茶色

この物語の主人公にして、語り手。高校生の時に『破壊組織』（後述）に拉致され、人間兵器（後述）に改造される。その時には、『55号』と呼ばれていた。

とある任務中、敵兵に襲撃されて、マイ（後述）とガンフ（後述）に助けられ、徐々に人間性を取り戻していく。その後は、『破壊組織』に命を狙われ、幾多の困難に遭いながらも、なんとか『破壊組織』を壊滅されて平和な日常を取り戻す。一年後、マイと結婚予定。

マイ＝マリア＝ルミエル

性別・女

年齢・17（物語終了時）

髪の色・茶色

瞳の色・茶色

この物語のヒロイン。敵兵に襲撃されたライカをガンフと共に助ける。とある朝、敵兵に無理矢理に連行させられるが、ライカに助けられる。それ以来、ライカに想いを寄せるようになる（劇中で呼び方が「ライカさん」から「ライカ君」に変わったのはそのため）。ある夜にライカに想いを伝え、見事カップル成立。それ以来、ライカの傍を離れなくなった。痺れ薬を飲んで動けなくなったライカを献身的に介護（？）したり、『破壊組織』のエージェントに連れさらわれるライカを助けたりした。ライカが『破壊組織』を壊滅させた後は、平和に暮らす。一年後、ライカと結婚予定。

ガンフ

性別・男

マイの祖父で、医者。敵兵に襲撃されたライカをマイと共に助けた。心がとても広い。サイガ（後述）とミオ（後述）の治療をして、二人を助けた。

サイガⅡシードⅡグリーズ

性別・男

年齢・18（物語終了時）

髪の色・白色

瞳の色・青色

バーストバルク族（後述）の青年。『破壊組織』のエージェントにミオと共に襲われ、ガンフの診療所に運ばれる。そこでライカ達と出会い、許可を得てそこに住み込む。ミオに気があったが、互いに思い合っていた事がわかり、カップル成立。

ライカと共に『破壊組織』を壊滅させて、平和な生活に戻る事ができた。

ミオ⇨ミリア⇨サイヴェリア

性別・女

年齢・17（物語終了時）

髪の色・茶色

瞳の色・茶色

シルバ族（後述）の少女。サイガと共に、『破壊組織』のエージェントに襲われ、ガンフの診療所に運ばれる。そこでライカ達と出会い、許可を得てそこに住み込む。サイガに恋慕の情を抱いていたが、互いに思い合っていた事がわかり、カップル成立。

ライカやサイガを陰ながら応援し、『破壊組織』が壊滅した後は平和に暮らしている。

ゲン

性別・男

『破壊組織』の首領。ライカ達を操っていたが、ライカの裏切りに遭い焦燥しきる。最終的には、破壊組織共々自爆した。

キーワード

破壊組織

ライカを拉致した、世界を武力で制圧しようとする組織。そこでライカは人間兵器に改造され、組織の道具となる。ゲンの項で記した通り、ライカとサイガに乗り込まれ、自爆した。

人間兵器

破壊組織が無作為に選んだ男子を拉致し、組織内で改造した『物』。身体の各部分に武器が仕込まれ、組織に忠実になるように頭も改造されている。殺人、破壊を目的とし、それらの行為に快楽を覚えるようにも改造される。

更に、もしも裏切った時、死体となった時のために、身体の各部分に爆弾が仕込まれている。

## シルバ族

マイ・サイガ・ミオ・ガンフが住んでいる国の民族。彼等の内、シルバ族はマイ・ミオ・ガンフ。普通の人間の姿形をしている。十年前、同じ国のバーストバルク族と民族紛争をした。

## バーストバルク族

サイガの民族。普通の人間の姿形をしているが、好戦的で、感情が高ぶると腕が膨張する。十年前、シルバ族と民族紛争をした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4006k/>

---

FINAL BATTLE!!! 【連載version】

2010年10月14日19時43分発行